

杏雲堂病院創立 125 周年記念講演会

平成 19 年 6 月 1 日（金）

午後 5 時～7 時

佐々木記念ホール



杏雲堂病院創立 125 周年記念講演会

次第

「杏雲堂病院創立記念日について」

理事長 黒川雄二

「創立者佐々木東洋の生涯」

順天堂大学医学部医史学教室客員教授 酒井シヅ先生

「佐々木隆興先生から今日まで-----発がん研究の流れ」

国立がんセンター名誉総長 杉村 隆先生

閉会の辞

杏雲堂病院院長 海老原 敏

総合司会

理事 佐々木紀久



ご挨拶

杏雲堂病院の歴史は、明治15年6月1日(1882)に、佐々木東洋が東京神田駿河台に杏雲堂醫院を開院した時にさかのぼります(詳しくは財団ホームページの沿革・財団年譜をご覧ください。<http://www.sasaki-foundation.jp/>)。佐々木東洋(1839-1918)は、長崎でオランダ医学を学んだ後、東京に戻り大学東校医長から博愛舎、東京府立病院を経て36歳で大学東校病院長に就任、その後、政府の脚気病院で洋方医部門を担当してから神田駿河台に杏雲堂醫院を開院しました。東京府医師会本部幹事、神田区医師会会長を歴任しました。第二代佐々木政吉(1855-1939)は、大学東校を卒業後5年間ドイツ遊学し、帰朝後日本人として最初の東京帝国大学医科大学教授に就任、さらに本邦医学博士第二号を授与されました。一方、自邸敷地内に研究室を設置(佐々木研究所の母体)、当時の国民病であった結核治療のため平塚市に結核療養所を設立(杏雲堂平塚病院の母体)しました。第三代の佐々木隆興(1878-1966)はドイツに5年間留学し帰国後、京都帝国大学医学部内科教授を勤めてから杏雲堂病院院長に就任。1939年に当時まだ私財であった研究所及び二つの病院など全てを寄附し財団法人佐々木研究所を設立し初代理事長となりました(病院は従って、財団法人佐々木研究所附属杏雲堂病院)。その目的は、佐々木東洋が掲げて以来の「医学の進歩に寄与し、医業をもって社会に貢献する」という理念を永続かつ実践することにあります。院長職と同時に研究を行い、生化学さらに吉田富三博士と共に発がんにおける業績により二度の帝国学士院恩賜賞を受賞したほか、文化勲章を受賞、文化功労者にも推戴されました。その後、別表にあるように、現在まで11名の先生が院長に就任されております。

おかげさまで、本年は杏雲堂病院創立125周年の年にあたり、かつ財団設立68年目を迎えております。財団は現在、神田駿河台に研究所(平成18年度に基礎研究から臨床研究に特化して研究を継続)と杏雲堂病院を、平塚市に湘南健診センターを事業所として有しており、これら三事業所で現在280名ほどが診療・健診・研究等の業務に日夜従事しております。

なお、創立125周年記念行事として記念講演会につづき、7月3日には財団・杏雲堂病院関連の方々をお招きし、記念式典及び海老原院長就任披露宴を開催致します。新たに海老原敏先生(前国立がんセンター東病院院長)を院長としてお迎えしたことを機に、杏雲堂病院は今後より一層がん診療に特化して行くこととなりました。そのために創立125周年記念事業の一環として、ハード・ソフト両面から杏雲堂病院を見直したいと思っております。皆様にはこれまで以上に杏雲堂病院に対してご指導ご鞭撻下さるよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

(財) 佐々木研究所理事長 黒川雄二



杏雲堂病院創立記念日について

(財) 佐々木研究所理事長 黒川雄二

おかげさまをもちまして、杏雲堂病院は、明治 15 年(1882)開院以来、本年 6 月 1 日で創立 125 周年を迎えることとなりました。以下に、開院日判明に至った経緯などを紹介致します。

杏雲堂病院の前身である杏雲堂醫院の開院の年は、これまで「杏雲堂病院百年史」などに記載のあるように、明治 14 年(1881)とされてきましたが、その開院日がいつであるかは不明でした。ところがこの度、酒井シヅ先生(順天堂大学医学部客員教授、医科学)のご協力によりついにその開院年が明治 15 年であり、開院日が 6 月 1 日であることが判明しました。以下はその根拠となる広告記事の文章(東京日日新聞及び醫事新聞明治 15 年 5 月 20 日号)です。

「佐々木氏の脚気病院 其広告左の如し 脚気は本邦の地方病と称すへき者にして我政府至仁の典 曩(さき)に明治十一年を以て脚気病院を設けられ 委員を置き 五年を期して本病の原因治法等を検究せしめらる 東洋も亦治療委員の命を奉し 爾来孜々(しし)今日に及へり 然るに今般該病院を廃せられたり 因てここに一病院を私設し 今後三年を期し 汎く本病者を治療し以て孜々の素志を達せんと欲す 乃ち余が治療を受けんと欲する諸君は本院に就き規則を一覧して入院あれ

六月一日開院

駿河台西紅梅町三番地

佐々木東洋」

お分かりのように、明治 15 年 5 月 20 日号の広告に、「六月一日開院」と明記してあるのですから、杏雲堂醫院開院日はまさに、「明治 15 年 6 月 1 日」であるわけです。

佐々木東洋が駿河台に杏雲堂醫院を開院したのは、明治 11 年から 15 年まで当時の国民病だった脚気を治療するために設けられていた公立(東京府)病院が閉鎖されたので、東洋自身が脚気病院を作ることを決意したからです。この経緯について、詳しくは財団法人佐々木研究所ホームページ内の「資料室」に、杏雲堂病院の沿革・歴史についてもホームページ内に詳しく記載しておりますので何卒ご覧下さい。

(なお、御茶の水界隈の病院としては、創立 168 年の順天堂醫院、創立 126 年の井上眼科に次ぐ古い歴史を持つ病院となるようです)。



創立者佐々木東洋の生涯

順天堂大学医学部医史学教室客員教授 酒井シヅ

杏雲堂の創立者佐々木東洋は、篤学精励の人で、卓越した学識と技倆を備えて患者から高い信望と尊敬を博した人といわれる。

東洋は天保10年(1839)6月22日に江戸本所四ッ目に外科兼薬屋を開業していた佐々木震澤の長男として生まれた。幼名は伝次郎、諱は師興、通称を東洋といった。父震澤から医業の手ほどきを受けた東洋は、18歳の時、西洋医を志して下総佐倉の順天堂に行き、佐藤泰然に入門、やがて泰然の後継者佐藤舜海(尚中)に師事、舜海が長崎に行くと聞くと、それに従って長崎に行き、オランダ海軍軍医ポンペに師事した。東洋と尚中、ひいては順天堂と深いつながりがこの頃にできあがっていたのである。文久元年(1863)に江戸に戻った東洋は、実父をたすけて亀沢町で開業。長崎帰りの若先生の人気は高かった。

明治になると、新政府から大学東校(東京大学医学部の前身)に出仕を求められた。大学東校では尚中が大学大博士、すなわち責任者の地位にあった。その下で大学得業生(助手)、少助教とすすみ、明治4年、ドイツ人教師が来日してからは、中助教となって助手を務めたが、このとき屍体で打聴診の腕を大いに磨き、打聴診の名手と言われるようになったのである。その成果は明治5年、著書『診法要略』として出版され、東洋の名声を高めたのであった。

しかし、明治5年、尚中がドイツ人教師等と対立して大学を辞めて国内最初の私立病院、博愛舎を開業したとき、東洋等もこれに従った。

翌6年、尚中が順天堂を開いて博愛舎が解散になると、東洋は亀沢町で再び開業したが、たちまち手狭になったために蛸殻町へ移転する。だが、そこでの開業も長く続けられなかった。翌7年、天皇の意向で貧困者のために東京府病院が開設されることに決まったとき、東洋に副院長就任が要請されたからである。そして翌8年に、東京医学校に3年の通学コースが設けられることになると、東洋に病院長就任の白羽の矢が立った。この短期通学コースの設置は尚中らが望んでいたが、ドイツ人教師ミュルレルに阻まれていた。それでドイツ人教師が満期退任すると、待っていたかのように短期コースが開設されたのである。尚中の厚い信頼を受けていた東洋が病院長になったことで、それまで閑散としていた病院に患者が殺到した。また、短期コースに全国から医学生が集まった。東洋には臨床医として手腕がいかに高かったかを語るエピソードがある。尚中は明治8年にお茶の水に順天堂が開院した直後、咯血して倒れ、命も危ぶまれたときに、尚中が選んだ主治医は東洋であった。もっとも信頼していた東洋に自分の治療を任せただけである。



翌9年、ドイツから帰朝した医学士池田謙齋が東京医学校校長になると、職を辞して再び開業した。このころ自宅は蛸殻町から駿河台に移っていた。これで落ち着くかと思っていたところ、翌10年西南戦争が勃発すると、開業を中断して軍医として出征した。西南戦争が収まると、直ちに家業に戻ったが、このように目まぐるしく職が変わったのは、明治初年、医学制度がつぎつぎと変わっていくのに、その要となる西洋医学者が少なかったからである。自己より公を優先する東洋は得難い存在であったのである。

開業生活に戻った東洋は、この年、日々研鑽を重ねてきた内科学をまとめて『内科提綱』と題して出版している。同書は一般の開業医から実践に役立つときわめて好評であった。

しかし、明治11年、東洋は再び政府から出仕を求められた。新設された脚気病院に勤務することを命じられた。この頃、東京では脚気が大流行していた。明治天皇自らも脚気に罹り、脚気に強い関心を抱かれて、脚気の治療法の研究を求められた。天皇は脚気病院を設けて、西洋医学と東洋医学の治療を比較検討することを求められたのであった。そのとき佐々木東洋が西洋医学の治療責任者になった。

明治16年までの予定で始まった脚気病院であったが、明治15年6月末で突然中断されることになった。そのとき佐々木東洋は自らの病院を駿河台西紅梅町三番地に開院して、脚気患者の治療を継続することを決意した。その開院の日を6月1日に定めて、新聞に広告した。杏雲堂病院開院の日である。

杏雲堂病院はたちまち門前に市を成したが、その後、政吉、隆興という優れた後継者を得て、杏雲堂は益々盛んになって行った。杏雲堂に一貫していることは、東洋の目指した科学的医学が継承され、発展したことである。

その後、東洋はしばらく対外的にも活躍する。明治19年に内務省中央衛生委員となり、明治23年には医師会の前身である東京医会会長になるが、その仕事と診療を除くと、ほとんどの時間がドイツ語の医学書を読むことに費やされていたという。

明治29年、東洋は政吉に後を譲って引退したが、政吉も、かれの養嫡子の隆興もドイツ留学を終えて、帝国大学教授を経て、杏雲堂院長になっている。東洋は杏雲堂が内科病院として他の追従を許さない病院として発展しているの見届けて、大正7年10月9日に功なり遂げて大往生した。享年は80であった。



佐々木隆興先生から今日まで - 発がん研究の流れ

国立がんセンター名誉総長 杉村 隆

佐々木研究所は、日本のがん研究に直接間接に大きな影響を与えた。外国の発がん研究者との会話にも、山極勝三郎先生の御偉業について、佐々木隆興先生、吉田富三先生のお話が出てきた。何人かの知人を東京大学医学部本館の資料室に案内したが、彼等が山極、佐々木、吉田先生の標本に感銘を受けた様子を目の当たりにした。

一回だけ佐々木隆興先生の講演を日本生化学会で拝聴したが、忘れ得ない印象をもった。戦後、吉田肉腫、複数の吉田腹水肝がん株を使わせて頂き、研究を楽しんだ。井坂英彦、小田嶋成和、佐藤博、高山昭三、長瀬すみ等の諸氏と佐々木研究所で相集い、全く非公式な研究集会をもった。佐々木洋興先生や吉田富三先生も顔を出されることがあった。やがて井坂先生は鹿児島へ、小田嶋先生は国立衛生試験所に行かれ、この会は自然消滅したが、その後長く、佐藤博先生から腹水肝がんや吉田肉腫を快く分けてもらい、研究を進めた時代もあった。

成長の早い系、遅い系、細胞がバラバラになる系、島になる系等、腹水肝がんは生化学の研究の宝庫であった。B型アルドラーゼ分子の switch off と A型アルドラーゼ分子の switch on があり、時に C型アルドラーゼ分子も発現したりするので、がん細胞の異分化と称えた。後年、長瀬すみ先生が無アルブミン-ラットを発見した。アルブミン遺伝子のあるイントロンの m-RNA のスプライシングに大切なイントロン・ジャンクションの近くの 7塩基が欠損していた。アゾ色素投与するとスプライシング機構に更なる異常が起こり、長さの異なるアルブミンを作る細胞が現れることを見つけた。今やスプライシングの機能分子変化は、発がんの機構の一つである。

今日、流行のように皆が唱える発がん研究の流れ：多段階発がん、がんの個性、がんの遺伝子変化、epigenetic 変化等の concept は、ずっと前に佐々木研究所の中にごめいていた。研究を楽しむという悦楽の気持ちで進展した、蝶々の中にある抗がんペプチドも、佐々木隆興先生に聞いて頂きたいような気がする。



杏雲堂醫院・杏雲堂病院沿革

明治 15 年 (1882)	佐々木東洋、神田駿河台に杏雲堂醫院を開院(6 月 1 日)、2 階建て病舎、病室 20
19 年 (1886)	施療部門を開設
27 年 (1894)	佐々木政吉、自邸敷地内に研究室を設置 (佐々木研究所の母体)。杏雲堂醫院拡張工事竣工
29 年 (1896)	佐々木政吉、院長就任
大正 3 年 (1914)	呼吸器科、胃腸科、心腎科を新設
5 年 (1915)	佐々木隆興、院長就任
12 年 (1923)	関東大震災のため杏雲堂醫院全焼、仮診療所開設
昭和 4 年 (1929)	杏雲堂醫院、本建築落成
13 年 (1938)	佐々廉平、院長就任
14 年 (1939)	財団法人佐々木研究所設立認可 (初代理事長 佐々木隆興)
17 年 (1942)	健康相談部新設
20 年 (1945)	東京大空襲、八王子市に臨時無料診療所設置
21 年 (1946)	御茶ノ水駅頭に一般市民への無料種痘所を設置
22 年 (1947)	御茶ノ水駅頭にて結核予防会と共催で街頭検診を行う。保険診療取扱い開始。
24 年 (1949)	胸部外科を新設
32 年 (1957)	杏雲堂醫院を、杏雲堂病院と改称
33 年 (1958)	塩谷卓爾、院長に就任
34 年 (1959)	癌相談室を開設 (癌化学療法 of 臨床面)
41 年 (1966)	臨床検査部を設置
43 年 (1968)	コバルト照射室を設置
45 年 (1970)	上田英雄、院長就任
49 年 (1974)	五味二郎、院長就任
53 年 (1978)	松井良吉、院長就任
56 年 (1981)	杏雲堂病院百年史刊行。杏雲堂病院創立 100 周年祝賀記念会
57 年 (1982)	佐々木智也、院長就任
63 年 (1988)	杏雲堂病院、新建屋落成。胸部外科新設
平成 2 年 (1990)	佐々木研究所新建屋・御茶ノ水杏雲ビル落成。
3 年 (1991)	坂本二哉、院長就任
5 年 (1993)	天神 美夫、院長就任
8 年 (1996)	松崎淳、院長就任。リウマチ科新設
14 年 (2002)	肝臓科新設
15 年 (2003)	高橋俊雄、院長就任
16 年 (2004)	医療連携室開設。杏雲堂病院新理念・基本方針など決定
17 年 (2005)	病院機能評価認定を取得
18 年 (2006)	杏雲堂醫院 (杏雲堂病院) 創立記念日が明治 15 年 6 月 1 日 (1882 年) と判明 読売 Weekly の調査で杏雲堂病院が患者満足度ベスト 10 入り
19 年 (2007)	杏雲堂病院、創立 125 周年。海老原敏、院長就任。頭頸部外科新設

将来構想 **がんに特化した杏雲堂病院**



歴代杏雲堂醫院・病院院長

明治15年6月1日-平成19年6月1日(1882-2007)

		就任期間	年数	前職	主たる専門分野
1	佐々木 東洋	1882-1896 (明治15年-明治29年)	16	杏雲堂醫院	内科(脚気、結核)
2	佐々木 政吉	1896-1916 (明治29年-大正5年)	20	杏雲堂醫院	内科(結核)
3	佐々木 隆興	1916-1938 (大正5年-昭和13年)	22	杏雲堂醫院	内科(全般)・生化学
4	佐々 廉平	1938-1958 (昭和13年-昭和33年)	20	杏雲堂醫院	内科(腎臓疾患)
5	塩谷 卓爾	1958-1967 (昭和33年-昭和42年)	9	杏雲堂醫院	内科(消化器疾患)
6	上田 英雄	1970-1971 (昭和45年-昭和46年)	1	東大医学部	内科(循環器疾患)
7	五味 二郎	1974-1978 (昭和49年-昭和53年)	4	慶大医学部	内科(結核・糖尿病)
8	松井 良吉	1978-1982 (昭和53年-昭和57年)	4	杏雲堂病院	内科(呼吸器疾患)
9	佐々木 智也	1982-1990 (昭和57年-平成2年)	8	東大医学部	内科(リウマチ)
10	坂本 二哉	1990-1993 (平成2年-平成5年)	3	東大医学部	内科(循環器疾患)
11	天神 美夫	1993-1997 (平成5年-平成9年)	4	杏雲堂病院	婦人科(子宮癌)
12	松崎 淳	1997-2003 (平成9年-平成15年)	6	杏雲堂病院	外科(消化器癌)
13	高橋 俊雄	2003-2007 (平成15年-平成19年)	4	都立駒込病院	外科(消化器癌)
14	海老原 敏	2007- (平成19年-)		国立がんセンター 東病院	頭頸科(頭頸部癌)



杏雲堂病院概要（平成19年）

名 称	佐々木研究所附属杏雲堂病院	経営主体	財団法人 佐々木研究所
病床数	一般病床 208床（5病棟）	届出基準	一般病棟入院基本料2（10対1）
1日平均患者数	外来:304.1名、入院:173.0名（病床利用率=83.1%、平均在院日数=14.0日）		
診療科目	内科、リウマチ科、消化器科、循環器科、呼吸器科、外科、整形外科、頭頸部外科、乳腺外科、婦人科、泌尿器科、放射線科、肝臓科、麻酔科、検診センター		
職員数 250.2名 （ ）は非常勤・派遣職員の常勤換算した内数	医師:29.5(6.5)、看護師114.2(3.2)、准看護師6.3(0.3)、薬剤師:7、検査技師:14、放射線技師:7、理学療法士:1、栄養士13、調理師:6.3(5.3)、クラーク・看護助手:23.5(13.5)、事務職員:26.4(4.4)、その他:2		
認定状況	病院機能評価(H17.7.25)、臨床研修指定病院(H16.3.31)		

手術症例におけるがん・非がん患者の割合（平成18年度）

	がん患者	非がん患者	癌患者の割合
外 科	83	113	42.3%
婦人科	57	307	15.7%
呼吸器科	12	15	44.4%
泌尿器科	7	0	100.0%
小 計	159	435	36.5%



参考資料一覧

- ・ 佐々木隆興先生論文集、(財) 佐々木研究所編、昭和 40 年
- ・ 佐々木隆興遺録・追憶集 「落葉集」、佐々木隆興遺族会、昭和 43 年
- ・ 杏雲堂病院百年史、(財) 佐々木研究所編、昭和 58 年
- ・ 財団法人佐々木研究所五十年史、(財) 佐々木研究所編、平成 2 年
- ・ (財) 佐々木研究所附属杏雲堂平塚病院百年史、(財) 佐々木研究所編、平成 9 年
- ・ 佐々木隆興録音テープ・CD・MD
NHK「朝の訪問」。約 15 分間のインタビュー記録。昭和 27 年 10 月 2 日（当時、74 歳）。
- ・ 吉田富三先生録音テープ・CD・MD
「佐々木隆興を偲ぶ」と題し、亡くなった日の夜に NHK から放送された緒方知三郎先生と吉田先生の追悼対談番組。昭和 41 年 10 月 31 日。
- ・ 東京日日新聞、明治 15(1882)年 5 月 20 日号コピー
開院日を 6 月 1 日と広告した記事が掲載されている。

以上をご希望の方に差し上げたいと思いますので、ご遠慮なく下記までお知らせ下さい。

〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台 2-2 (財) 佐々木研究所事務局 大高宛
TEL: 03-3292-8092 FAX 03-3292-3371 メール; otaka@po.kyoundo.jp

なお、その他多くの参考資料を、(財) 佐々木研究所ホームページ内の「資料室」に載せておりますので、是非ご参照下さい。

<http://www.sasaki-foundation.jp/foundation/siryositu.html>

